

平成25年度SSHマレーシア海外研修 活動報告

山口県立徳山高等学校

1 研修概要

(1) 事前研修

ア 研修班

No	班名	研修テーマ
1	中等教育学校班	山口県及び徳山高の紹介と現地校における効果的交流の研究
2	マラ工科大学班	山口県及び徳山高の紹介と現地校における効果的交流の研究
3	市街地研究班	市街地整備の特徴や都市の成長に関する研究
4	ピューター工場班	スズを含む合金製造技術の開発の歴史と企業としての発展の研究
5	鍾乳洞班	洞内深層部の調査研究と国内の鍾乳石・石筍の比較
6	熱帯動植物班	熱帯特有の動植物の調査・日本の野生動物との比較研究

イ 事前学習発表会

各班ごとに調べた事項をまとめてスライドを作成し、12月27日（金）に相互発表会を行った。

ウ ALTによる英語授業

12月12日（木）にALT（カール・ウィンダック）による90分の英語授業を受講した。テーマは「Miracle Fruit : Taste the Science」（ミラクルフルーツを用いた味覚実験）。味細胞に関する理解とともに英語の講義を受ける際の聞き方のポイントを学ぶことができた。



事前学習発表会



ALTによる英語授業(1)



ALTによる英語授業(2)

(2) 研修日程

日	行程
1 / 4 (土)	学校 → 福岡空港 → (シンガポール経由・マレーシア KLIA) → クアラルンプール泊
5 (日)	市街地班別行動 (現地学生が同行) → ダークケイブ (鍾乳洞) → ロイヤルセラランゴール (スズ工場) → クアラルンプール泊
6 (月)	マラヤ大植物園 → マラ工科大学 (英語講義、交流会) → 学生寮宿泊
7 (火)	マラッカ科学中等学校 (交流) → マラッカ動物園 (交流) → KLIA 空港
8 (水)	シンガポール (経由) → 福岡空港 → 学校

(3) 現地研修活動

ア マラ工科大学国際教育カレッジ日本高専予備教育コース (KTJ) 学生との市街地探索

研修班 6 班のそれぞれに K T J の学生ガイドとしてついて、交通機関を利用して市内の歴史的建築物や先進のビルなどの各所を見学。マレーシアの歴史や宗教、市街地インフラの発達状況などへの理解を深めた。

イ マレーシア伝統産業であるピューター (スズ合金) 製造工場見学

ピューター工場を訪問、マレーシアにおけるピューター食器製造の様子の見学や展示館において製造技術発展の歴史を学ぶとともに、ピュータープレートにアイスボウルに加工する体験を行った。



市街地探索出発前の打合せ



クアラルンプール市内



ピューター加工体験

ウ 熱帯植物園の見学

マラヤ大学附設の熱帯植物園を訪問、英語のガイドによる解説を受けながら園内の特徴的な熱帯植物を観察した。

エ K T J 学生とともに授業を受講

数学、物理、化学の英語での授業を現地学生と一緒に受講。進度が日本の高校 1 年より進んでおり、生徒は現地学生に英語で内容を解説してもらいながら受講した。



熱帯植物観察

オ 学生寮交流会館でK T J 学生と交流会

夕食交流、現地の伝統的な遊びの体験の後、生徒による日本紹介のプレゼンテーション、ソーラン節披露と現地学生による伝統的ダンスや武術のパフォーマンスなど活発で温かい交流を行った。



KTJ学生と一緒に講義受講



交流時のソーラン節披露

カ ムザファ・シャー科学中等教育学校での交流会、合同科学実験、食事会

日本紹介のプレゼンテーション、現地生徒による合唱・パフォーマンス、本校生徒によるソーラン節披露。その後理科実験室に移動し、合同での科学実験を行う。実験内容は、偏光板の「DVD簡易分光器による炎色反応のスペクトル観察」。現地生徒とは英語で助け合いながらの実験となった。実験後は、日本の本をプレゼントして交流活動、そして食事などの時間を過ごした。



ムザファ・シャー科学中等教育学校生徒の合唱



合同科学実験

キ 中等教育学校生徒とともに動物園見学

中等教育学校近隣のマラッカ動物園を訪ね、現地生徒とともに園内の動物を観察して歩いた。サル類、鳥類、蛇類、爬虫類など熱帯ならではの様々な動物とその飼育環境について学ぶことができた。



マラッカ動物園見学

2 活動報告会（平成26年2月12日（水））

5・6限の授業時間を用いて、1年生全クラスを対象としてSSH次活動報告会を実施。その中で、SSH海外研修の6班がポスター発表を行った。また、そのうち次の1から3の三テーマについては、各々10分程度の英語による全体発表を行った。

(1) マラ工科大学班（英語発表）

マラ工科大学日本留学予備教育コースの学生の生活や日本に対する理解、日本語の学習状況、将来の日本留学に向けた思い、英語の位置づけ、交流会での伝統文化の披露などの様子を紹介するとともに、私達はどのようにして英語を効果的に学ぶべきか、ということを経験した。

(2) ピューター工場班（英語発表）

ピューター合金の組成と加工材料としての特性の紹介、ピューター加工産業とイギリス産業革命との関係、現地企業の発展の経緯と現在の商品の紹介などを行った。

(3) 中等教育学校班（英語発表）

日本の生徒と中等教育学校生徒に行ったアンケートをもとに、「好きな教科」、「将来働きたい国」、「英語教育の在り方に対する満足度」について日本の生徒と現地の生徒の結果を比較紹介した。



SSH活動報告会

(4) 市街地研修班（ポスター発表）

マレーシア市内にはマレー建築、中国建築、英国風コロニアル建築、イスラム建築、プラナカン建築、現代建築など多様な建築物があることなどを紹介して、同国が過去の植民地時代からの建築物と新しい建築物を共存させながら、現在も発展中であることを報告した。

(5) 鍾乳洞班（ポスター発表）

鍾乳洞の成立過程、バトゥ洞窟開発の歴史、洞窟内に棲む生物の日本の秋芳洞との違い、バトゥ洞窟の宗教との関わりなどを紹介し、現地の気候と洞窟内生物の関係、信仰の対象としての発展の歴史など同国ならではの自然や文化について報告した。



ポスター発表

(6) 熱帯動植物班（ポスター発表）

マレーシアの植物は熱帯雨林の高温多湿な気候の元で熱帯樹など巨大な植物が多いことや、マレーシアは夏冬の温度差がほとんどないため年輪がないため、「カーボンリーディング」（樹木内の炭素の放射性同位体を利用）によって樹齢を割り出していることなどを紹介して、熱帯の気候が植物の生態に大きな影響を及ぼしていることを報告した。

3 生徒の感想紹介

「言葉の壁を越えて」

様々な民族が共生する、国際色豊かなマレーシアでは、あふれんばかりの活気と人々の積極性が感じられ、今でもそれが鮮明に蘇ります。

日本では、初対面の人と打ち解けあうのにどれくらいの時間がかかるのでしょうか。ましてや言語の違いがあると、研修前は期待と不安が入り混じった気持ちでいっぱいでした。しかし、現地の方と話をしていると、不安はすぐに解消されました。どんな会話を投げかけようと考えているうちに、相手からどんどん質問をしてくれたのです。しかも流暢な日本語で！それにはもう、圧倒されました。

特に市街地研究では、言葉が通じないときに携帯電話の通訳アプリを用いて単語を理解したり、写真を共有してお互いの文化の特徴を伝え合うことができました。つたない英語を相手が一生懸命理解してくれたおかげで、会話がスムーズになっていくのを感じ嬉しく思いました。このように、自ら積極的に行動を起こすことによって、新たな発見や知識を得ることができるのだと感じました。また会話については、どう話すかではなく、どう伝えるかが重要なカギになると知りました。



マラ工科大学での記念撮影

マラ工科大での講義はとても面白かったです。印象的だったのが、発言の多さです。日本人とは正反対で、自分が思ったことはすぐに人に伝えるよう心掛け、合っているのか間違っているのかは二の次だと話していました。講義の内容を理解するのは難しかったけれど、様々な意見をもとに、さて自分だったらどうするだろう、と考えをめぐらせながら話を聞いていました。休憩時には、これからの進路について語り合いました。学生さんのほとんどは日本の高専への編入を目標にその他の知識もどんどん吸収したいと考えているようで、私たちより遥かに先の事を見据えていると感じました。好奇心旺盛なマレーシアの学生さんは、さらに自分たちの世界を広げるために色々なことに対して関心を持って取り組んでいるのだと分かりました。このようなことが国際情勢の影響なのだと思うと、私たちも何らかの ACTION を起こしていくべきだと思ひ知らされました。

このように、好奇心を持つこと、すなわち ACTIVE な気持ちの持ちよう、言葉の壁を越えて、様々な見方や考え方、表現力などが養われ、幅広い人間関係を築いていくことができると思いました。“I hope our friendship will be forever.” これは、現地で知り合った学生さんからいただいた言葉です。これからも、今回のような貴重な経験や出会いを一生の財産にしようと思ひます！

「伝えるということ」

thought, opinion, idea, view…「考え」と和英辞典で引くといくつもの単語があり、選択するのに何分悩んだらうか。

私は中等教育学校班の一員として、プレゼンテーションの原稿を担当した。英作文で頭がいっぱいになり、いつの間にか難しい文法ばかりを使っていた。先生に添削していただいてから、簡単な表現を使うほうがずっと伝わるということに気付いた。その時から、私は自分のコンセプトを「伝えること」にした。

ところが中等教育学校を訪問する前日の夜、私は急に原稿を変えてしまった。ふと、ただ淡々とこれを読んで楽しんでもらえるのか、と不安になったからだ。私は日本の伝統行事を担当していたのだが、分かりにくい部分は説明を加えたり、ジェスチャーを交えたりした。声を出して一緒に言ってもらおう部分も取り入れ、伝えることを意識した原稿へと改良していった。話し方も、ゆっくりはっきり言うように心がけた。相手の反応を見ながら話したくて、原稿はほとんど覚えた。その結果、生徒達は笑ったり、私たちの言葉に相槌を打ってくれたり



ムザファ・シャー科学中等教育学校での記念撮影

と楽しんで聞いてもらえたようで、達成感を感じた。

もちろん伝えることは簡単ではなかった。会話の中では言いたいことをうまく言えず、消極的になってしまうことも多々あった。また現地の英語は思った以上に聞き取れず、普段のリスニングとの違いに驚愕した。もっと英語がしゃべれたら…ともどかしく思ったが、その時気がついた。私はまた難しいことを言おうとしていた。文法が間違っているでも、単語をつなげるだけでもいい。大事なことは伝えることなのだから、と。それから積極的になれて、コミュニケーションが楽しくなった。

学生寮では、部屋の鍵の閉め方を英語で学生の方に聞くことができた。問題が起こった時、コミュニケーション能力があれば人に助けを求めることが出来る。コミュニケーションは自立するためのツールでもあるのだと思った。

「伝えること」それは人を笑顔にし、友達を作り、問題を解決することさえも可能にする。この研修で学んだ伝えることの喜びを、今度は事後学習で生かしたい。この先、原稿ではなく、自分の言葉で伝えられるように、経験を積み重ねていこうと思う。そして、積極的に伝えようとする姿勢を忘れずにいたい。